2022/2/6
（オマケの「日本語教室」鵜呑み、避けるべし）書庫版

題名から「お」を抜き去った「説教」とは、読んで字のごとく元々は「教えを説く」事ですから別段悪い事ではなかった筈です。
では何故、その「説教」の接頭に嫌味ったらしく「お」迄つけて「お説教」として嫌われる様になったのか？
是は自分の経験からして見ますと
「的を射ていない事を、しかも長々と繰り返しされるから」うんざりしてしまうか敬遠したくなる事に尽きると思います。
或いは千歩下がって的は射ていたとしても「余りにくどく居丈高」なのも折角射ている的の存在を忘れさせて逆効果でもありましょう。
しかし上述の理不尽又は不適際を取り除いた「的を的確に射て、しかも短いもの」であれば、結構有難いものである経験もして参りました。
つまり「説教全般」が悪い訳ではないのです。ものによりけりなのです。
同じ様に「忍耐全般」が悪い訳でもありません。
強制的に強いられて無理やり従わされる「忍従」はよくありませんが「人事を尽くして、天命の到来（天与のチャンス）をじっと待つ（耐え忍ぶ＝忍耐）は、決して悪い事ではありませんし、事業をやっていると「いくら事業者側が一方的に人事を尽くしても（努力しても）それを活かす時機（チャンス）が到来しないと、時機を得てのみ活かされる努力が、そのメカニズムの掟に従って、時機到来前ではチェーンがついていない自転車のペダルの如く空回りして結局は失敗に終わる事」がわかってきたので、その時期の到来をじっと待つのは事業戦略上極めて有効な手立てであるからです。
なので「忍従」ではない「忍耐」は決して悪い事ではないのだと。
むしろ必要欠くべからざる戦略手段なのだと思っております。
以上二つの例を申し上げましたが、我々戦後教育を受けたあらゆる世代の人間は、ともすると語句の原義を読み取らずに食わず嫌いのまま誤解や早とちりをし、あまつさえ「十把一握

（ひとからげ)」に良いも悪いも顧みないまま丸ごと捨て去る「大変な無駄（チャンスロスや大遠回り、灯台下暗しの損)」をしているような気がしております。
漢字や語句をそのまま直訳して、それを「原義（元の意味)」だと見做しただけでも意外な意味が浮かび上がってきたり、思いもよらぬ正反対の解釈すらあり得る事に最近何度も出くわしたりしたものですから本日はちょっとそのお話をさせて戴きました。
余談）
何につけ辞書を引く前に自分の頭で自分なりに考えてみるのも面白しさがあります。
又、付加効用として、想像力の訓練にもなりますし、自分の意見が持てるので辞書に丸呑みされる事（自分の側からは考えもせずに鵜呑みにする）も防げます。
後は辞書と自分の意見の「差分」をどうするかというオマケの謎解き」の楽しみも得られますし。